時代を切り拓く

Epoch Maker

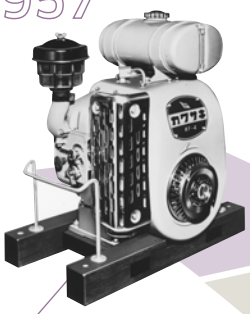
【vol.012】

プロの声を聞き、働く人にやさしい汎用エンジン

農機具や芝刈機、携帯発電機などの主役である汎用エンジン。川崎重工は60年前の1957年に初号機を発売した。日本の農業機械化を背景に事業の基礎を固め、世界の芝刈機市場ではプロユーザーからの絶対的な信頼を得るまでになっている。その秘密は、ユーザーの声に一心に学ぶ開発姿勢にある。

ANNIVERSARY 60 1957-2017 60 YEARS OF ENGINEERING EXCELLENCE

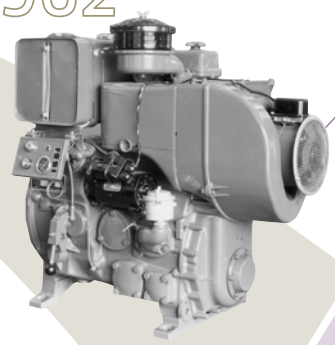
1957



KF4（250cm³, 6馬力）

旧川崎航空機工業が製造・販売を開始した汎用エンジンの初号機は、1957年2月に販売を開始した。航空機用の空冷エンジンをベースにした空冷4サイクルガソリンエンジンで、鋳鉄シリンダー、トンネルタイプのクランクケースの採用など、最先端の技術を盛り込んだ耐久性に優れたエンジンとして爆発的な人気を得る。

1962



KP209（1,750cm³, 30馬力）

「KP」は「川崎&ボルシェ」の略。当時の国内農機具市場はガソリンエンジンと水冷ディーゼルエンジンが主流だったが、欧州では空冷ディーゼルエンジンが主流だった。川崎重工は将来の海外販売を見越して西独ボルシェ社と技術援助契約を結び、共同開発したのがKP209をはじめとするKPシリーズだ。契約は86年まで続き、ディーゼルエンジン事業の発端となった。

1984

FB460V（460cm³, 12.5馬力）

アメリカの農機具メーカーDeere & Company社の要請を受けて乗用の芝刈機用に開発されたのがFBエンジン。現在も、汎用エンジン事業の売上の大部分を占める北米の芝刈機関連事業に進出した記念すべき機種であり、その後のモデルチェンジ機種も大好評を博した。後の「Kawasaki V-Twin」の先駆けともなるモデルだった。

2016

FX850V-EFI（852cm³, 27馬力）

アメリカの芝刈機市場を席巻した、コンパクトで低振動・低騒音の空冷縦軸「Kawasaki V-Twin」エンジンの最新モデル。新型の燃料噴射システムを搭載し、平地はもちろん斜面でも走行スピードと芝刈機への負荷を自動調整して生産性を高め、芝刈のプロユーザーたちから絶大な評価を得ている。

大手農機具メーカーからの協力申し出を受けて旧川崎航空機工業が小型の農機具用エンジンの製造と販売を始めたのは1957年、つまり60年前のことだった。わが国の農業に機械化の波が訪れ始めていたとはいえ、耕うん機などに搭載される汎用エンジンは、改良を重ねるにつれヒット商品を生み出すようになる。累計の生産台数は初号機発売から11年後の68年に100万台、76年には500万台、そして83年には1,000万台を突破した。

一方80年代になると、アメリカでは芝刈機用エンジンの需要が本格化。川崎重工は、89年にはアメリカ・ミズーリ州メアリービル市にKMM（Kawasaki Motors Manufacturing Corp.）の分工場としてメアリービル工場を建設し、汎用エンジンの生産拠点を構築した。アメリカでも汎用エンジン業界では初めてとなるOHV（オーバーヘッドバルブ）を採用した歩行型芝刈機用エンジン、また高級化の要請に応えた空冷縦軸型エンジン「Kawasaki V-Twin」などのヒット商品を送り出し、市場での地位を確立した。

国内外で数々のヒット商品を生み出した背景には、汎用エンジンを使う作業者の声に徹底的に耳を傾け、また使われ方を観察し続けてきた「ユーザー第一」の開発姿勢があった。例えば2ストロークエンジンにおいて刈払機用エンジンでは業界初のダイアフラム気化器を採用して作業姿勢に対する制約をなくしたり、動力散布機専用のエンジンを開発した。こうして高出力・低燃費・低騒音・低振動という「働く人にやさしい汎用エンジン」へと進化を続けてきた。

汎用エンジンの詳しい情報は
川崎重工ブランドサイト
『Stories』をチェック!